

日本気象学会昭和35年度

総 会 議 事 録

日 時 昭和35年5月13日 11.15~12.20

場 所 大阪府職員会館

出席通常会員 158名	委任状総数 130名
書面参加会員 162名	以上総数 450名

5月10日現在で通常会員は1597名で、定款第36条による出席会員総数320名、並びに委任状および書面によらない出席会員数64名の条件を満たして総会は成立。

次に議長は出席会員の互選によるのであるが、例により大谷大会委員長を推すことを一同に計り、満場一致同氏と決定した。

大谷東平氏が議長席につき、総会が開催せられたが、その内容は次の通りである。

(1) 大谷議長の挨拶

今回の大会は関西支部で御世話することになり、その運営は大阪管区気象台に一任されたので、職員一同一生けんめいに努力している。何分多数のお客様を迎えて至らぬ点が多いと思うがおゆるし願いたい。大会がスムーズに終り、よい思い出を持って帰って頂きたいと思っている。

(2) 島山理事長の挨拶

今年の春の大会及び総会は大阪で開くことになり、周到な準備の下に進めて頂いた関西支部の方に厚く御礼申上げる。他の議事をひかえているので簡単に1年間の活動をふり返りたい。学会の根本的事業は研究発表会の開催と学会機関誌の発行とにある。研究発表会は春秋の大会の他、毎月月例会を開き、機関誌は気象集誌、天気、研究ノート等夫々定期的に発行されているが、その内容が会員諸君の満足を頂いているかどうかはまだ自信がない。会員一般の方々の御意見や注文を支部を通じて又直接お寄せ下さるようお願いしたい。また色々な事を誌上で又支部宛にお願いすることもあるが、お返事を頂けないことが多い。自分達の学会であることを考えて、自分達会員の満足出来るように協力されたい。

又、地球物理関係の他の学会との関連(内容とか、集会の時期)、月例会のやり方として数年来、シンポジウムとか、或る題目をきめてやっているの、それ以外の新しい研究の申込が最近ない。これは春秋2回の大会でよいのか、等に対する意見も頂きたい。

75周年記念事業の会計の決算が今年度で名実共に完結

した。数値予報国際シンポジウムは、今秋11月7日より1週間予定されている。昨年春の大会で会員の賛成を得て、秋の臨時総会で学会の事業とすることに決定、その後準備委員会(後組織委員会、実行委員会に改められた)で準備を進めている。くわしくは後程担当理事が説明する。

(3) 学会賞授賞式

毛利圭太郎氏および小林禎作氏に本年度学会賞が満場拍手のうちに授賞された。(内容については別記参照されたい)

(4) 昭和34年度事業経過報告 淵 理 事

理事会便りを天気のにせているので御存じのことと思うが、簡単に説明する。会員数は1597名、昨年より34名増加、天気も外国へ出るようになっていて題目に英語をつけ、終にコンテンツをつけた。集誌の方も優秀論文を紹介しようとその概要をのせるようになった。外国の論文も、出来るだけ見て頂くように外国文献委員会を作り、外国文献のしゅう集についてもいろいろの手段をこうじている。集誌の量が少なく、おくれるのは、編集委員が努力しても原稿がないのではどうにもならないので奮って投稿をおねがいます。

問 学術会議にはわれわれの代表として理事長、和達長官に出て頂いているのであるから、学術会議の模様を報告して頂きたい。

答 短時間にもれなくお話しするには準備があるので、別の適当な機会にゆずりたい。

(5) 数値予報国際シンポジウム準備経過報告

正野理事

昨年秋正式に承認され、12月28日付で正式招待状を出した。その後招待者86名中48名から返事があり、参加30名、不参加14名、出席を希望しているが未定のもの4名となっている。そのうち正式参加は31名である。

現在論文数は外国28、国内(募集中)25、合計53きまっている。今これ等の時間の配分に頭をなやましている。

ソ連関係は個人の返事はきているが正式には来ていない。中共は全然返事がない。出席者の顔ぶれ、人数等から、これなら大体成功しそうと云う所までできているが、1月頃から毎週、後には2週間毎に委員会を開き準備を進めている。

その他はエキスカージョンの場所が日光から箱根へ変更した。後援は気象庁、日本学術会議の外、IUGGと気象協会も加った。場所は都市センター。宿泊はホテルニュージャパン。期日は11月7日～13日の1週間、土、日は箱根へ。

その後各専門の方々に小さな集りを持ってはどうか、又関西、九州、北海道等見物したい人もあるから、各管区で一般講演会を持つのも有効であろう。

これ等は各グループ、管区で計画してほしい。その連絡はシンポジウム関係で行い、時間の調整は今井理事が担当している。

問 中共への招待を積極的に努力されたい。

答 2度手紙を出したが返事がない。今の所手のうちようがない。

問 理由は何か。

答 わからない。

問 手紙は当人に届いているのか。

答 わからない。

問 手紙は個人宛に出したか。

答 個人又は大学宛に出し、正式には誰の所へ出したらよいか聞いている。中共は全然返事がないからわからない。ソ連は個人に出しプライベートに返事があった。

問 乱流関係のサブセッションを行いたいが、経済的援助は期待出来るか。

答 数値予報に関する限り、寄付を期待している。気象学会にあまりめいわけかけないつもりであるが、それ以上は今のところ何とも云えない。

答 (会計委員) 出来ることなら出したいと思うが寄付の集り具合による。

(6) 昭和34年度決算報告 吉武理事
吉武理事から別紙(191頁)の内容の通り説明があり、満場一致可決された。

(7) 本年度事業計画並びに予算案審議

吉武理事

吉武理事から別紙内容の通り説明があり、次の2、3質問応答の上満場一致可決された。

問 今年の大会としてはこれだけか。

答 秋に大会がある。

問 大会予算は去年より少ないか。

答 去年は予算をオーバーしたので、今年は国際会議もあるし、しめて7万円にした。

問 秋の大会は国際シンポジウムの日と続けるか。

答 常任理事会でできる。

(8) 提出議題審議

(イ) 藤原賞設定に関する件

淵理事から提案理由の証明があり、選考規定は常任理事会で作ることとし、満場一致可決された。

(ロ) 学会賞々金額に関する件

異議なく承認された。

(ハ) 海洋上の高層観測の整備に関する件

増田会員から提案理由の説明があり、次の質問応答の上異議なく可決された。

問 飛行機のデーターが入っているが、その欠点とU-2型機の観測データーが日本の気象界にもたらされているか。

答 飛行機はある指定高度を飛ぶので不十分である。数値予報では多くの層が必要で、一層では余り意味がない。U-2は果して気象庁へ具体的資料を送っているかどうか知らない。U-2の問題は3月31日に提出議題をしめ切った後に起ったのであるが、気象学会として何らかの意味で意志表明することが必要であると思っている。

問 主旨は賛成であるが、成立した時の処置はどうするのか。

答 具体的処置は気象庁、政府機関でやってほしい。

問 これは日本だけでなく、国際的ネットワークを作らねばならない。WMO、ユネスコ等にアピールすることも考えられるが。

答 アメリカでは実施して成果が得られていると云うことだ。

(ニ) サハラ原爆実験に対する抗議に関する件

矢野直会員から提案理由と宛名はフランス政府とし、同時に気象学会、原子力委員会に提出した旨の説明があり、宛先は常任理事会に一任することとし、異議なく承認された。

問 宛名は数年前に行なった時には政府宛にはしなかった。前と同じにしてはどうか。

答 常任理事会に一任するか、小委員会にはかかるかにしたい。

問 原爆としないで核兵器実験としたい。水爆も使うかも知れない。

答 国際用語としてはその方が正しい。今まで通りにしたままで訂正した方がよいと思う。

問 日本だけでやっても役に立たない。

答 外国の事情も調べて、協力してやる。

(9) その他

(イ) 来年度の当番支部に関する件

北海道支部孫野理事から次のような説明があり、来年度の当番支部は北海道に決定した。

北海道支部でおひきうけすることになると、春と秋では秋の方がよい。春は5月では観光シーズンには早すぎるし、春はこんで旅館のサービスが悪い。台風シーズンにさえかからなければ秋がよい。

(ロ) 日米安全保障条約の改定について学会有志提出(中野道雄) 学会として政治的な問題に直接介入すべきではないが、学問は国際的な協力のもとで進歩するもので、特に気象はこの点が強く今回のとりきめで学問の自由を阻止し、軍事気象的要素を強制し、世界的学問の交流をさまたげて学問の進歩発展を阻害されることがないように気象にたずさわるものは努力しなければならない。

日米安全保障の実態がわれわれに充分把握出来るよう慎重な審議を要求する請願書を準備するから、賛成の方は署名をお願いする。

この問題は昨秋臨時総会の時の原水爆禁止の支持署名と同じように取り扱うこととし、大谷議長の閉会の辞の後、今総会は無事終了した。

海洋上の高層観測の整備についての要望書

最近陸上における高層観測は観測網の整備と観測精度の向上によって著しく強化され、気象解析ならびに天気予報に大きな貢献をしている。しかし、海洋上、特に太平洋上の高層観測は皆無に等しく、全くの空白状態であるといっても過言ではない。

このことは天気図解析を不確実なものにし、必然的に予報精度を低下させている。特にこの問題は台風進路の適確な予報、洋上船舶の海難防止、航空機の発達に伴う航空路の予報等には極めて重要な問題であり、この意味でも海洋上の高層観測の整備が強く要望される所以である。現在海洋上の表面観測は商船、漁船などに依頼して実施されており、かなりの成果を収めている。勿論、定点

観測船による高層観測も望ましいものであり、日本気象学会も定点観測の復活を強く要望してきたのであるが、何分観測船数も少なく経費もかさむので現在最も経費が少なく実現性のある大型船舶による高層観測の実施が望ましいと思われる。しかもこの方法による洋上の高層観測は諸外国でも実施されつゝあり、わが国においてもこの方法を採用することは気象学の国際性に鑑み極めて時期に適したものであると思う。

日本気象学会は海洋上の高層観測の整備が極めて緊急を要するものであることを訴えると共に、気象庁ならびに関係政府機関が速やかにその実現について方途を講じられんことを強く要望する。1960年5月15日日本気象学会

サハラ原爆実験に対する抗議声明

日本気象学会は多年にわたり核爆発実験にとまらぬ危険な影響を警告し、資料、声明、署名などを通じてその停止を訴えてきた。

その後、各国の世論は、米ソ英三国の核爆発実験の一時的停止を実現させ、ジュネーブの核実験停止会議においては三国の協定に達しようとしている。

現在、三国の実験が停止中にもかかわらず、成層圏には多量の有害物質が貯えられ、放射性降下物は落下し続けている。とくに降下物中の長寿命核種の地上蓄積量は年々増加し、人体および生物にたいする影響を無視でき

ないような状態に達している。

しかるに今年の3月、フランス政府は突如、サハラ砂漠において原子爆弾の実験を行い、さらに、今後第2、第3の実験が計画されているといわれる。先の実験によっても中近東および日本において雨および気中放射能の増加が認められた。

このような時にあたり、日本気象学会は先の声明の主旨にそって核爆発実験のそく時停止を再び強く要求するものである。

1960年5月13日 日本気象学会

昭和35年度日本気象学会賞受賞者

1. 日本上空のジェット気流の解析的研究

毛利圭太郎 (気象庁予報部)

わが国で偏西風の強いことは古くは館野における高層観測などによって気付かれ、戦時中は風船爆弾という好ましからぬ方面にもこの事実は利用されたこともあるが、戦後ロスビー等によって偏西風中の風速集中としてのジェット気流の存在が確認され、その集中の機構および大気大循環との関連が明らかになり脚光をあびた。

日本付近のジェット気流はとくに強く世界の注目をひいたが、毛利圭太郎氏は主にこの日本付近のジェット気流を詳細に解析し、その平均状態、解析的に見た成因、ジェット気流に関連した高層のサブトロピカル・フロントならびにその前線発生について研究し、また、東経140度線に沿う断面図上のサブトロピカル・ジェット、ポーラー・ジェットおよびサブトロピカル・フロントに関する一つのモデルを提出した。

特に、サブトロピカル・フロントはこれまでにない新しい概念であり、氏はこれが極東で特に強いことはヒマラヤ連峰、チベット高原などの影響であることを数多くの断面図を使って示した。

氏の研究によって、多くの新しい知識が発見され、これらは今後の予報技術および大気大循環理論の発展にも役立つものと思われる。よって本学会は同君に学会賞を贈ってその顕著な業績をたたえる次第である。

論 文

- Mohri, K., 1953: On the fields of wind and temperature over Japan and adjacent waters during winter of 1950-1951. *Tellus*, **5**, 3, 340-358.
- Mohri, K., 1956a: An analysis of jet streams over Japan on 3 November 1952. *J. Meteor. Soc. Japan*, **34**, 1, 29-33.
- Mohri, K., 1956b: On the characteristic structure in the mid-tropospheric westerlies accompanied with recurved typhoons. *Geophys. Mag.*, **27**, 2, 237-247.
- Mohri, K., 1956c: An aerological study of heavy rainfall over west and central Japan during early summer 1953. *J. Meteor. Soc. Japan*, **34**, 5, 244-253.
- Mohri, K., 1958: A note on an extremely strong jet stream on February 8, 1953. 75th Anniversary Vol., *J. Meteor. Soc. Japan*.
- Mohri, K., 1958: An example of upper frontogenesis over the Far East. (右欄下†につづく)

2. 雪の結晶習性に関する研究

小林禎作 (北大低温科学研究所)

雪の結晶習性に関する中谷の気温、湿度の影響を示した Ta-S ダイアグラムは、降雨機構の最も重要な基礎問題として、戦後各国において追試や理論的説明が試みられてきたが、小林氏は論点となっている湿度の測定および微水滴の除去に入念な方法を用いて上記の Ta-S ダイアグラムをほぼ完成した。

しかし、天然雪の成長には気温、湿度のほかには気圧という次元が存在する。同氏は減圧装置内で上記の関係を三次元的に広めて実験をくりかえし、気圧の影響は天然の場合にはそれほど大きなものではないことを明確にし、また、雪の結晶習性の物理的解釈の面において従来の数々の不明な点を明確に解決した。

これらの研究は独創的なもので、世界の雲物理学の注目するところである。

同氏の研究は雲物理学の分野に画期的な躍進をもたらしたものである。

よって本学会は同君に学会賞を贈ってその顕著な業績をたたえる次第である。

論 文

- Kobayashi, T., 1954: On the Ice Crystals Formed on Hydrophobic Substances; A General Survey. *Contributions from the Institute of Low Temperature Science*, No. 6, 7-18.
- Kobayashi, T., 1955: Some Remarks on Replica Methods. *Contributions from the Institute of Low Temperature Science*, No. 8, 75-86.
- Kobayashi, T. and Higuchi, K., 1957: On the Pyramidal Faces of Ice Crystals, *Contributions from the Low Temperature Science*, No. 12, 43-54.
- Kobayashi, T., 1957: Experimental Researches on the Snow Crystal Habit and Growth by Means of a Diffusion Cloud Chamber. *Jour. Met. Soc.*, 75 Anni. Vol., 38-47.
- Kobayashi, T., 1958: On the Habit of Snow Crystals Artificially Produced at Low Pressures. *Jour. Met. Soc.*, II, 36, 193-208.

† *Geophysica*, **6**, (Palmen Volume).

- Mohri, K., 1958, 1959: Jet streams and upper fronts in the general circulation and their characteristics over the Far East. Part I. *Geophys. Mag.* **29**, 1, 45-126. Part II. *Geophys. Mag.* **29**, 3, 333-412.

34 年度 収 支 決 算 書

収 入		支 出	
会費	2,703,334	印刷編集費	2,360,340
雑誌, 図書頒布	1,138,491	集誌	419,120
気象研究ノート		天象集誌	1,110,960
その他	992,206	気象研究ノート	830,260
雑収入	137,236	図書購入費	186,433
仮前繰越金	247,500	図書通信費	235,545
		図書通議費	247,635
		総会・大会費	93,289
		役員会費	98,346
		例会費	31,000
		外国委員会費	20,000
		選挙管理委員会費	5,000
		学支部交付金	28,000
		支事務員給与	102,200
		支事務員印刷費	518,291
		支事務員経手費	116,550
		支事務員整理費	209,505
		支事務員国際委員会	129,868
		支事務員準備金	39,318
		支事務員旅予国際会議	23,050
		支事務員旅予国際会議	40,000
		支事務員旅予国際会議	1,740
		支事務員旅予国際会議	508,117
合 計	4,228,301	合 計	4,228,301
基金	650,000		
職員退職積立金	20,000		
		変化なし	

昭和 35 年度 収 支 予 算 書

収 入		支 出	
会費	2,671,200	印刷編集費	2,584,800
A 会	1,296,000	気象集誌	808,800
B 会	775,200	天象集誌	1,056,000
団体会員	600,000	気象研究ノート	720,000
雑誌, 図書頒布	1,161,200	図書購入費	100,000
気象研究ノート	920,000	図書通信費	250,000
その他	241,200	図書通議費	213,000
雑収入	112,000	総会・大会費	70,000
仮前繰越金	508,117	役員会費	78,000
		例会費	40,000
		外国委員会費	20,000
		選挙管理委員会費	5,000
		学支部交付金	28,000
		支事務員給与	105,000
		支事務員印刷費	560,500
		支事務員経手費	130,500
		支事務員整理費	200,000
		支事務員国際委員会	100,000
		支事務員旅予国際会議	70,000
		支事務員旅予国際会議	60,000
		支事務員旅予国際会議	50,000
		支事務員旅予国際会議	100,000
		支事務員旅予国際会議	200,000
		支事務員旅予国際会議	261,217
合 計	4,452,517	合 計	4,452,517
基金	650,000		
職員退職積立金	20,000		
		変化無し	